

眞 生

第九卷 第三號

苦難を越ゆる者

- 古徳の言葉に「暑に居ては暑を熱殺し、寒に居ては寒を寒殺す。」と云ふやうな言葉があつたと思ふが、此の語はすべての上に味つて見れば非常に面白い言葉であります。
- 何か一つの困つたことに出會つても、それを徒に避けようとするれば反つて手も足も出なくなつて、全く困つてしまふことがあります。そうした時にはよろしく全心をこめて、眞正面からぶつつかつて、之が解決の道を講ずることです。
- 世の中にはそれを知らずして、徒に之を悲しみ、之を恨み、之を避けて、いつまでもそれを脱することのできぬ人が多いのであります。が、それは眞に道を得た人の爲すべき態度ではありません。
- 何事も一切を如來に任かせた我身であるならば、毀譽も褒貶も私の問ふ處ではありません。一切を天地の大道に任かせて、眞に生く可き道に精進努力するならば萬事はそれに過ぎたることはありません。
- 人が入ると入れないのはそれはその人に任せればよいのです。先方が善人であらうと悪人であらうと、それは私共の知つたことではない。ときの事状によつて、それはたゞその時の爲すべき最善を盡せばよいからであります。
- それ以外のことまでは己に私共は責任を持つ必要はないのであります。又持たぬでもよいのであります。あとはたゞ一切を如來に任かせて、大自然のまにまに生きて行けばよいのであります。人事を盡して天命を待つとは即ちこのことを云つたのであります。（念）

人るたれば選

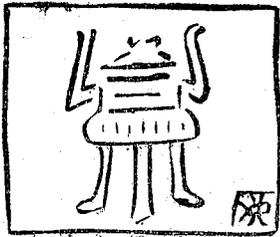
目次

佛の心	觀道
選ばれたる人	魁子
善導大師の宗教	土屋觀道
宗教教團と政黨	
政治に就て	土屋觀道
現代意識と宗教生活	
吾明便り	土屋觀道

佛の心

- 佛教の理想から云へば淨土教も聖道門と同じく、一切衆生の解脱にあります。たゞ自分の力によつて修行して悟りが開けぬものが、佛の力によつて助かる云ふのが淨土教の特長であります。
- 自分の力で悟りが開け、三學を成して佛けさなれる人はよるしくそれによつて之をやるべしであります。けれども自分にその力がなくして、此の世が思ふやうにならぬものはどうせう。
- その見ぬいで、その爲めに本願を立てられたのが阿彌陀佛であります。だから佛の本願には善人も悪人もありません。智者も愚者もないのであります。十方の衆生を總てに呼びかけてゐられるのであります。
- ところが佛の本願をさぐつて見れば善人を救ふよりも悪人を救ふのが目的であります。智者を助けるよりも愚者を助けるのが根本であります。それは一体何故でありますか。
- 智者や善人はそのまゝにして置いてもいつかは自分の力で解脱が出来るからです。愚者や悪人はそのままでは永久に解脱の道がないからであります。
- 世には此の理を知らないものだから、悪人や愚人が救はれるのをつまらない教へだからと思ふ人があります。けれども自分の力で解脱のできないものにとつては如来の本願はご有難いものはありません。如来の本願あればこそ眞に生きることもできるからであります。
- 乍然此の世に佛の慈悲と云ふものがあるならば自分の力で悟りを開くことのできる人より、そののできないで困つてゐるものを、何とかして救つてやりたいと云ふのが本當ではないでせうか。(觀道)

- 怒つてゐる人へは何も云ひ寄る人がありません。云ひ寄つても何も耳へは入らぬからです。
- 其通り信仰も、業の強い人へは持ち掛けて行ても、内に燃えてゐる業のために、寄せつけません。一軒の家でも、鼎の沸き立つやうに暗闇のある家へは、念佛が向いて行つても、内へ踏み込むことが出来ません。だから信仰のことが幾分でも訊けるさか、お念佛が少しでも申せれるさか云ふことは、其人、其一軒の家に於て、餘程心の内が鎮まつて穏やかになつて来たからであります。内に聴けるだけの用意が出来、地ならしが出来て来たからであります。
- これを思ふと、假令確りした信仰はまだ無くとも、立派なお念佛は申されなくとも、既に淺間しい中からも求めつゝ、行けるさか云ふことは悦ぶべきことだと思ひます。
- どの人の中へも、どの家の中へも、仲々「お念佛」が這入れません。金は有る、商賣は繁盛する、子供は産れる、座敷は建つ、お祭りのやうには賑やかであつて、「信仰」の這入る餘地がない。或は蹴る、泣く、喚めく、中は戰場であつて、這入る隙がありません。本當に「信仰」が中へ喰ひ入つて行ける人、喰ひ入つてゐる家が何軒あるでせう。
- 信仰に醒めてゐる人は、眞に「選ばれたる家」である。而かも其信仰に因つて生き、信仰に依つて協力してゆける家は、實に千中稀に見る二三であります。願くばお互に、眞に「信仰の人」「信仰の家」になりたいと思ひます。
- 「信仰の人」とはどういふ人でせう、特別に佛を見たり、人の心が見え透ひたり、全財産を施したり、商賣を放つて措いて念佛を勤めに歩く人と斗り限つたことではありません。腹の中に眞りや、慾や、愚痴があるが儘、其怒りが意地悪く人をたしなめるが爲めばかりに現はれぬ、人を訓へ、長くなつて貰ひたいがために出る、又自分を叱り、自分を教へるがために現はれる。慾も單なる慾でない、眞實の大慾、眞實の善慾。愚痴も單なる愚痴でない、向上のための強い反省となつてゐる人。
- 斯く煩惱がその儘、色をかへ、味を更へて現はれるやうになつたのが、「信仰になつて来た」のだと思ひます。恰度濫い柿の濫がいつさばなしに「甘味」に變つて来たやうに、同じものが變つて現はれるやうになつたのが、信仰の徳だと思ひます。眞にお念佛を稱へることに困つて、自然に其徳がついて来るのだから、どうかもつきく精進して行きたいと思ひます。(魁子)



善導大師の宗教

土屋 觀道

一、大師の出生

- 大師は西記六百十三年、支那の泗州に生れた人であります。其の亡くなられたのが隆永二年三月十四日と云ふから、丁度今年が大師の滅後一千二百五十年に當ると云ふので、我が日本に於ける浄土教徒は心から之を記念しやうとしてゐるのであります。
- 西記六百十三年と云へば隋の煬帝の九年に當り、隆永二年と云へば唐の高宗の時代でありますから丁度大師の在世は隋の末から唐の初めに當るのであります。
- 幼少の頃、西方極樂の圖書を見て深くそのことを心に刻んだと云ふのですから、可なりに小さい時から宗教には熱心であつたと思へるのであります。
- 然に此の時代はいかなる時代であるかと申しますれば漢朝の滅後三百年、殆ど全國をあけての戦亂のあとを受けての統一の時代でありまして、それは恰も我國に於ける平安の末期から鎌倉の初めにも相當する時代であります。
- 従つて、時代は全く戦亂の爲めにあらゆる疲れを來たした時であると共に、又一面にはそれらの中

からも更に新に生きんとする帝國の風雲が巻き越さるゝの時でありました。

- だから、一般佛教の上から見ても、民衆の心には可なりに力強い信念が動いてゐるのであります。して、隋唐の佛教には他の時代で見ることのできない壯大なものがあるのであります。
- 殊に支那佛教界に於ける經典翻譯の上には忘るゝことのできない玄奘、三藏と時代を同じくするのであります。佛敎隆盛の第一に位する頃であります。

二、時代と背景

□ 乍然、更に當時の有様を深く觀察しますれば、あまりに玄奘の力が偉大であつた爲めに、當時の多くの名僧たちは殆どその爲めに吸収されて、他の宗には暫く名士が途斷えたかの感があります。従つて、當時の各宗には今までのやうに有名な人々が一寸居ないやうな感じがして、各宗衰退の感が無いでもありません。

□ 乍然、それにもかゝらず、玄奘を中心とする佛敎の隆盛は到底筆紙の及ぶところではないのであつて、彼を中心とする譯經の盛んなこと、その奉る法相唯識の研究は全く古今を絶したありさまでした。

□ それと云ふのも、從來の佛敎では已に幾多の研究がしつくされたかの感があると同時に、從來の戦亂が漸く平靜の姿となつて、文武百官が漸く統一せられて來たところに、新たな佛敎の思想が此の地に流れて來たからでありました。

□ 従つてそこには新しきものを好むと云ふ人心も働いてゐたことでありませうが、そこに猶一層の力を注いだものは玄奘を援くる當時の皇帝の重大なる力が働いてゐたと云ふことであります。

□ 乍然、それにもかゝらず、又一方を望むれば是等の佛敎は主として翻譯を中心とし、唯識法相の

學の如きは寧ろ教學中心の佛教でありまして、一般民衆上には其の實力が及ばなかつたの感があります。

□然に此の時代の民衆は今までの戦亂の爲めに身心共に疲弊し、それらの學問佛教によつては到底その心の満足を得ることはできなかつたのでありました。そしてまた、此のことは從來の一般佛教に於ても之を得ることができなかつたのでありました。

三、時代と要求

□それと云ふのも今までの佛教は主として、自力聖道の法門でありまして、自分の力で解脱を得ると云ふのが一般の教であり、それを修するには一生を費すも仲々にそれを得ることが困難であつたからであります。

□然に之等の民衆は今日一日の生活さへ行くには出来ないものが多いのでありまして、そんな悠長なこととしては今日一日さへ生きて往かれぬからであります。従つて、如何に理論としては高尚な教へでありまして、それによつて今日の生活ができない位では底到之を信することはできないのであります。

□此のことは何れの時代も同じでありまして、一般の民衆は今日の生活がこのまゝで出来ないからこそ、眞に心から苦しんでゐるのであつて、之を脱せんが爲めの宗教であるのに、宗教を求むることによつて、反つてそれが増すやうなことでは到底之を信することができぬのが普通であります。

□然に從來の佛教はともすれば釋尊の偉大を語り、人間の理想の高きを誇つて、その實際生活には顧みぬのが常でありました。従つて、それを専門とする特種の階級即ち生活に困らぬ人々の宗教にはそれでも結構ではありましたが、實際民衆の宗教には全く絶縁の宗教でありました。

□然ば聖道門以外には他力淨土の法門は無かつたかと云ふに、之を歴史に調べれば必ずしもなかつたのではありません。已に其のことは印度に於ても、龍樹、馬鳴等の論師に於てそれが語られて居るのであります。

□従つて、それ位でありますから、自分の力で解脱しやうとしても、それが實際に出来ないことを氣付いた人々には内々之を求めてゐた人も可なりに多かつたことと思はれます。

□このことは少くとも少しく佛教の教理を研究する人の等しく認むるところでありまして、中にも印度に於ては龍樹以後、堅慧、無着、世親等の淨土教があり、支那に於ては慧遠や曇鸞、道綽等の淨土教もあつたのであります。

□慧遠の如き東晋の頃已に有志百二十三人の結社を結んで淨土往生の念佛を修したと云ふのですから、善導を去ること二百五十年も昔に當るのであります。

□乍然、それにもかゝわらず之等の念佛が一般に擴まらなかつたのは、未だ民衆の要求がそこまでに到らなかつたのであると同時に、念佛の教へも未だそれに適すべく民衆のものとしては徹底しないものがありました。

四、宗義の内容

□それは所謂宗義の内容であります。否、少くともそれら宗義に對する内容の説明が其の人の見るところを異にした爲めに、善導大師のやうな立派な宗教として從來の淨土教が獨立することができなかつたのであります。

□従つて、從來の淨土教は主として、他宗他派より眺めたる淨土教で、その中には更に幾多の缺陷があるかのやうに見られてゐたのであります。従つて、善導以前の淨土教は從來の教佛學から云へば未

だ完全な浄土宗とは見ることができなかつたのであります。

□此の意味に於て、從來の浄土教は其の年代の古きにかゝわらず未だ多くの佛敎學者の許すところとならず、従つて多くの民衆には深く佛敎の教へに自らを入れることも出来なかつたのであります。

□然ばその各宗より眺めたる從來の浄土教と云ふものはどこに缺陷があるせられたのでありませう。それは浄土と念佛とそれを信する衆生の機類に關する批難であります。

□その中でも浄土、機類に關する問題は天台宗と唯識宗との二者の間に二つの異りがありました。即ち天台では凡夫が浄土に生れることはできるけれども、その浄土は凡夫と聖人（即ち佛）とが居を同じうしてゐるから、凡聖同居土と云つて、眞實の報土ではないと云ふのであります。

□之に對して、唯識の方では浄土を判ずることは眞實の報土として深いけれども、それは普通の凡夫では到底往生はできないと云ふのであります。

□従つて、前者は浄土を劣つたところと見、後者は凡夫では往かれぬと見るのであつて、兩方共に凡夫往生の眞實の世界とは見ぬことに於て同じでありました。そして今一つの問題は前にも申し述べたやうに衆生の稱へる念佛のことであります。

□それは凡そ佛敎の原理として、少くとも支那に於ける善導當時の佛敎に關する考へは願行具足の問題であります。願とは願いであり、目的に達せんとする望みであります。行とは實行であり、其の目的に達する方法の實行であります。

□即ち之を簡短に云へば佛敎の目的即ち私共が眞の解脱を要するには、必ずそれに達する方法を實行せねばならぬと云ふのが、當時の一般佛敎に於ける考へでありました。

□然に今念佛は此の意味に於て、往生の業因とはならぬと云ふのであります。即ち南無阿彌陀佛と云ふことはたゞ佛名を稱するに過ぎぬのであつて、單なる歸依物に外ならぬ。従つて、そこには往生の

願望の發表に過ぎないからそれによつては往生はできぬと云ふのであります。

□尙之を詳しく云へば念佛はたゞ往生したいとの願のみの發表であつて、その願を達する方法としての行がないからそれだけでは不可であると云ふのであります。之を從來の學問的言葉では別時意と申して、たゞ來世往生の結縁に過ぎぬと申すのであります。

□こゝに報土と云ふのは諸佛の願行の世界として現はれた清淨國土を意味するのであります。所謂自然の浄土、天然の彌陀と云ふやうなものでないことを意味するのであります。

□言換へれば願望成就の世界を言ふのであります。所謂天地の大道に立脚して善因善果の法則に従つて、諸佛の本願に従つて現はれた理想の世界を云ふのであります。

五、大師の宗教

□然に導師は此の疑難に對して根本より之を打破して、そこに新たな眞化の妙釋を發見せられたのであります。それは即ち今日の浄土宗がそれでありました。このことは今日から眺むれば何でもないことこのやうであります。從來の佛敎の通解を破らすして此の原理によつて、こゝにそれらの批難を脱して眞實の浄土教を現はすと云ふことであります。

□大師は彌陀の浄土が如來の本願に酬いて現はれたものであつて、天台で難するやうな低い浄土ではなく、全く私共の理想するところの報身報土であると云ふことを證據立てられたのであります。

□そして、法相宗などで云ふところの凡夫の身では浄土に往生できないと云ふ衆生の機に對しては、それは如來の本願力に依るからして決してできないものではないと云ふ點で、凡夫報土の往生を極力主張せられたのであります。

□又念佛が稱名であつて、その稱名だけでは願生の意味だけであつて往生の業とはならないとの難に

對しては、南無と云ふことが歸命のことであつて、それがまた發願回向の義であり、阿彌陀佛と稱することは彌陀の本願に乗ずるの行であるから見られたのであります。

□従つて、大師の主張には以上の如き當時の佛教々學の上にも明に一つの主張と識見とが現はれてゐるのでありますが、大師そのものの宗教としては更にそれが信念となり、信仰となつて、念佛一行の上にもそれが現はれてゐるのであります。

□此の意味に於て大師の宗教は正しく實行の宗教となりました。而も其の結果としては念佛の上にも色々の瑞相が現はれ、其の深き信仰の體驗と宣傳とは當時の民衆をして殆ど歸向せしめざるを得なかつたのであります。

□その他導師の宗教には三心とか四修とか云ふことの注意もありますが、それらのことは常に念佛して往生を願ふものには、自らその人にそなはつて來るのでありますから、こゝでは殊更に申す必要はありません。

六、民衆の要望

□乍然こゝに私の注意して頂きたいと思ふことは此の善導の開宗によつて、少くとも今までの貴族的佛教が沛然として民衆の佛教となつて來たことでもあります。而も其の後に於ても、凡そ佛教中の一大部門として聖道の諸宗に對して淨土門が建立せられたのは全く導師の力であります。

□しかのみならず、本來釋尊の佛教なるものが今日の研究から見れば特種の階級にのみ信せらるべきものではなかつたのでありまして、其の精神は釋尊の當時在俗の中にも充分の了解があつたのであります。

□然にそれが一時僧侶の専有に歸した感があり、之に對して一時在家の佛教として菩薩の思想が盛ん

であつたのでありましたが、それがまた自力の方面に行き詰つて貴族化せられたのであります。

□従て、民衆の上には宗教の要求があるにもかゝらず、仲々にその機會が來なかつたのであります。然に今や佛教の眞理が淨土宗として社會民衆の上に現はれて來たのは、全く導師の力とも云つてよいのであります。

□そしてまた、その力が我が日本の國にも波及して、遂に法然上人によつて淨土宗ともなつたのでありまして、少くとも我が淨土宗では導師がなくては全くその宗さへないと云ふことになるのであります。

□その他、此の淨土教が最も民衆の力となることは聖道門の理想と淨土門の理想とが其の究極に於て全く一致するのみならず、其の機根と方法に至つては全く批較にもならないほどに、淨土教が進んでゐると共にそれがそのまゝ、民衆本位の宗教となつてゐることでもあります。

□而も此の点が特に淨土教の優れてゐるところでありまして、いかなる愚かなるものも罪深き人々も如來の大悲には悉く抱擁せられて、無限の救いに入られると云ふことでもあります。

□此の意味に於て、佛心の大慈悲は確かに一切の民衆の要望となりました。而てそこに念佛を中心とする民衆の宗教が時代を超越して各地に行はれるやうになりました。

□之はまた確に如來の大悲が一切の衆生の上に徹底して來た証據とも云ふべきであります。男女貴賤を論せず、老若貧富を問はず、たゞ念佛の一行で一切の救いを抱括する善導の宗教は正しく古今を改定せられたものと云つてもあえて多言ではないのであります。

□惱めるも、慰めとなり、力なきもの、救いとなるの宗教は宗教と云ふ宗教の多きなかに、此の善導の宗教こそは其の最たるものであると、私は今も尙信じて疑はないのであります。

宗教教團と政黨政治に就て

土屋 觀道

○宗教と政治とのこゝに關しては私も常に考へてゐるところであり、政黨政治と宗教教團のことについては未だ充分に考へたことがありませんでした。然に今度越后から原吉郎氏が民政黨から立候補して立たれることになり、私共の道友の有志はそれの爲めに全力を注いでの應援でした。

○而もそれについて、私にも應援に来るやうにとのことでもあり、また私としても、氏の爲めに全力を注いで應援したいと思つたのでありましたが、此の際私はいかなる立場から之を應援すべきかを深く考へさせられたのであります。

○其の結果私としての立場は明に政黨を超越し、國家全体社會全体の上から之をいかに指導し開拓すべきかの立場にあり、以つてそれに一致する政黨政治の實際を支持すればよいので、私は此の立場から今度も此の事に當つた次第であります。

○然に私共の道友にも已に此のことを了して、全部悉く此の立場から之に一致して之を援けて下さつたことは、私の衷心から感謝して止まぬところであります。之も日

頃からなる道友の信仰と至誠のあふれ、政見の一致からであります。

○殊に私の立場としては公私の不一を論ずるものであります、それが實際生活となり、實際問題となつてまれば公私一如の中にも、また公私自ら別るゝものがあるのであります。

○凡そ宗教家の立場として之を私から見ますれば、私の道友の中には政友會に屬する人もあり、民政黨に屬する人もあります。又今後に於ては其の他の政黨に屬する人もないとは限りません。然にさうした場合、私共眞生同盟はいかなる態度をとるべきかは可なりな重大なる事であり、

○そこには政見の一致する場合もあり、或は一致しない場合もないとは限りません。かうした意味に於て、眞生運動が若もそれらの政見の相違から分列せねばならぬやうでは、會そのものが反て政黨政治に左右せられることになり、宗教本來の眞意を失ふことは私の堪えないところであります。

○乍然、私共の宗教運動が延いて生活の問題に至り、更

に轉じて社會問題や國家問題にまで及ぶことのあるべき

は、生活と宗教と離れざる限り又當然のことでありませう。従つて其の結果として、私共の生活が今日の社會問題や國家問題として政治問題にまで離れて來ることも、又自然の道理と云はねばなりません。

○此の意味に於て私共の宗教運動は時として、生活問題や政治問題にまで及ぶことのあるべきはもとよりであり、

○乍然、今日のところ私は同じ信仰の上にさへあれば、其の人の生活や政黨の如何は問ふところでありませぬ。従て、そこには各自政見の自由を許し、之を尊重して、其の人の實際生活を伸張せしむることが寧ろ道友相互の紳士的態度であると思ふのであります。

○従てその人が眞實の信仰に生きて正しく此の世に生存し、社會國家を中心として政黨政治を論ずるならば私は其の人の政黨の何ものたるを問はず之を議會に送つてその人の力を充分に發揮させたいと念願して止まぬのであります。

○此の意味に於て、私は政黨政治を超越して、そこに人物本位の代議士を送ればよいと思ふのであります。言かへれば道友の人々は自らの信ずる人物に向つて自由の活動を願つてよいと云ふことであつて、會そのものとして

は政黨政派に偏するものではありません。

○然は今日に於ける私の立場は何であるかと申しますれば、今の處私は全く嚴正なる中立の立場にあるものであります。そして常に如來を中心として社會國家を眺め、そこから眺めた社會國家の完全なる發達と、その念願にそすべき政治の常道を指導すれば足るのであります。

○従て、今日の私の運動は主として宗教を中心とする人類の自覺でありまして、一切はそれからの割出されたる生活であります。従つて、私の政治運動もすべてはそれから割出されたる民衆の自覺運動でありまして、一般の政治運動とは其の質を異にするものであります。

○従つて、此の自覺の上からさへあれば私共の政治運動はそこに政見の相違や、政策の異りは全く問ふところではありません。従てそこには各自の政見を尊重して各自の政見と政策とによつて其の政治を行はしむることにあるのであります。

○乍然今日の多くの政黨は割合に金持に都合よい政治が多くして中産以下の人々の爲めには甚だ不都合の点が多いのであります。之は主として今日の民衆の無自覺にして、未だ社會の幸福を自分達の力によつて建設することのできるの知らないと同時に、今日の既成政黨が本當の意味に於ける民衆の利益を代表してゐないの知らない

いからです。

○だから此の意味からしても私の考へは今少しく社會民衆の一般に向つて政治の何者たるかを知らしむると同時に、更に一方にはさうした意味での自覺ある道友を實際の政界に送つて之が改善とその淨化とを計るのが目下の急務であると思ふのであります。

○此の意味からして椎尾博士や原氏の如き信念の人々を社會國家を中心として、人類の生活を改善すべく議政壇上に送ることは何よりのことであると思つたのであります。これまた私が幾分にも兩氏の爲めに運動させて頂いた所以であります。

○然に博士は不幸にも落選の身となられたけれども原氏が彼の地に於ける最高点で當選せられたことは私に於ては限らない喜びの一つであります。恐らくは道友の方々も心からなる御喜びを下さるると思ひます。然し乍ら椎尾博士のことに就きましても博士の限りなき信念の活動は今度の選舉運動によつて一層輝いたのを私は感ぜずには居られませんでした。

○此のことは原氏も同様であつたらうとは思いますが私は氏とは別体となつて働いたのであるから、そのことが全く判りません。乍然博士の今回の全身の活動は全く信仰の人でなくては伺へない眞剣の世界であつたと私は深

く感じた次第であります。

○それに私は今度の應援によつていかにも政治が男性的であるのと、而も多くの聴衆の中に限りなく全力を以つて進むことのできるのを此の上もなく嬉しく感じた一人であります。一方には政治の裏面としては私の未だ全く知らない闇黒の世界や、悲哀の世界のあることもとよりでありませう。乍然少くとも眞實の生命からほとばしる民衆生活の政治的運動は恰も生命をとしたる眞人の生活であります。

○願くは道友の中にもかうした意味に於て私は宗教の民衆化、及びその宗教の生活化を標榜して政界に立つ人の多からんことを望むものであります。

○因に名古屋では眞生會と向上婦人會とが働き、柏崎では光明眞生會が総動員の姿でありました。中には原氏の政黨を異にする爲めに従来の關係上その政黨の同僚に對して心配した人もあつたやうでありましたが、此の際それらの關係も圓満に解決して各地の道友が各自の所信に向つて進まれることのできたのは又何よりの幸いでした。(一九三〇、三、四)。

○宗教は娯樂ではない生活である。

○宗教は暇人の遊び事ではなく、眞に生きる爲めの生命である。

現代意識と宗教生活

土屋 觀道

○法話と實際とは可なりに違ふ場合がある。寺院や講堂での話がいかに本當であるかのやうに聞かされて、其のときだけは自分でも成る程と感心して聞いたにかゝらず、其の後數日を経て考へて見ると、一向自分のものとなつてゐない時がある。

○之は話を聞く方でも、それだけ注意がたらないことも事實であるが、また之を話す人の方でも可なりに不注意な場合がある。それは主として其の話の話題が聴衆の感興を引くやうにのみ誇張して説かれる場合があつたり、又その話が特にその時のことをみを抽象して説かれる爲めに、其の時ばかりはいかにさうだと感じたことも、あとではそれが實際生活に觸れて來ないからである。

○言換へればこれはその人の話とその聴衆の生活とがどこかで一致しない点があるからと云はねばならぬ。

○而て、従来の淨土宗の安心なるものも、少しく之を考へれば其の説くところと其の信ずるところとに可なりに多くの相違するものがあるかと思ふ。一例を挙げれば今までの厭離穢土、欣求淨土と云ふ安心の説き方の如きが

それである。此の世はつまらないところ、正に厭ふべく離るべきのところ、淨土は結構なところ、欣び求むべきところである三口では説く。さて、それではそれらの人が果して實際生活に於て、それだけの厭欣心に動いてゐるのであらう。

○たまたまこのことを寺院や講堂で聞けばいかにもそのときだけは此の世が厭になり、淨土が戀しい心も起る。乍然それはたゞその時だけの感じに過ぎない。従て、其の話の内容もたゞ單に此の世の厭はしい方面のみをとり集めての話であつて一時的な厭離の心に過ぎない。

○そこで家に歸つて日常の生活にたづさわつて見ればそんな事ではとても此の世に働いて行くこともできず、かゝと云つて、昔のやうに山や寺なごに世を避けても、全く食つて行かれるわけでもなく、又それほごにまで此の世が厭はしいことばかりでもないで、寺院や講堂での話はいつしか忘れてしまふのである。

○また、之を話す人たちにしても、その實、此の世に生きていのが勢一パイであつて、決して心から此の世を厭ふて居るのでないから、結局高座での話と自分の生活と

は一致しないことになる。否、單に一致しないばかりでなく、反て矛盾した生活になつてゐるのが今日の多くであらう。

二

○然し、打ち明けたところ、此の世の中は果してそんなに厭ふべく離るべき世界であらうか。否、少くとも今日の社會は何とかして此の世に生きて居りたい、離れたくないとして、此の世に愛着を覺えてゐる人の方が多いではあるまいか。此の世がまゝならぬとか、つまらないとか云ふ人もその實は此の世に居りたいとの念が強いからに外ならぬ。

○乍然、このことは昔も今も恐らく同じやうである。従て昔の人が此の世を厭ふたと云ふこともその實は此の世が厭はしかつたのではないけれども、此の世が思ふやうにならないので人間の壽命も戰亂の爲めには安態が得られず、色々の生活の問題や義理と人情の衝突で、此の世が苦しくなつた位のこと、心から此の世を厭ふたものはないかと思ふ。

○だから、少しでも此の世に於て、自分の生活が安定を得られ、此の世で楽しく暮せるものならば好んで此の世を去らうとする人はないやうである。否、それどころが大がいのことならばたとい此の世がまゝならぬとしても

できるだけは此の世に奮闘して、此の世に生き永らへやうとするのが人心の常である。

○而も、それさへも此の世で思ふやうにできぬものだから、此の世に生きるに堪えかねて、初めて此の世を厭ふやうになり、此の世以外に安養の世界をも求むるやうになつたのが、此の世に於ける一般の淨土信者でなかつたか。

○少くとも、平安の末期、鎌倉の初めに於て我が國に淨土思想の勃興して來たことは此の意味に於ける社會生活の一大厭迫によると私は見るのである。そのことは當時の公家時代から武家時代に遷る社會の状態を靜觀すれば民心の動きがよく見ることができるのである。

○さうした理由で公家時代が武家時代に變つたか昔の學者は主として、公家の墮落につれての武家の勃興を語るのみである。だが、今日の新しき經濟學者はそれを經濟生活による經濟組織の變化であると云つてゐる。

○言換へれば古き社會と新しき社會の交替期とも云つてよい。而て此の間淨土教に頭をつき込んだ人々は、此の階級に於ていかなる階級の人々であつたのか、それは多くの場合此の世に於ける敗殘者、所謂此の世に於ける自立の力のない人のみが集つて來た感がある。

○之は一面宗教の性質としては力なき者を救ふ三云ふ点

に於て、その宗教の偉大なるところではあるが、そしてまたそこに着眼して、こゝに一宗を開いたのは正しく法然上人の偉いところでもあるが、少くとも之を社會の實際から云へば彼等は必ずしも人生の眞意義に目ざめて佛道を求めたかは疑問である。

○だから、社會の組織が一變して、昔のやうな社會の壓迫がなくなつて、此の世で自由の活動が許され、此の世で自由な生命の保証が與えられたなら、之等の人々が従來のやうな教への厭離穢土や欣求淨土で此の世を厭ふて淨土を求むるかは大なる問題である。

○而も、それも知らないで、昔のやうな説教で現代の人々をその信仰に入れやうとすることは宗教家その人も大に反省せなければならぬことではないか。そしてまた今日の所謂宗乘學者や此の世を憂える宗教家の大いに反省すべきことであらう。

三

○實際のところ、私には此の世に於て、色々と氣にくわぬところもある。そして又そんな方面ばかりを考へれば全く此の世がいやになつて來る場合もないではない。乍然それだからと云つて、此の身と心とを打ち捨て、一刻も早く死後の淨土へ往生をとげたいと云ふやうな、昔風の信仰にはなれな

○之は私の考へが間違つてゐるからであらうか、それとも従來の説き方が間違つてゐたからであらうか。私の實際生活は此の意味に於て、昔の古き説方といさゝか相違するものがある。

○それは厭離穢土欣求淨土と云ふことは必ずしも此の世を捨て、一刻も早く未來淨土を願ふと云ふことではなくて、寧ろ此の世から如來の慈光に觸れて、永遠に眞實の生活に生きることであると思ふからである。

○然ば従來の考へと私共の考への間に於て、それだけの相違があるか、それは必ずしも一概に相違ありとのみはいへないのかも知れない。乍然昔の人々はともすれば佛教で云ふ現實の世界と普通の人の云ふ現實の世界とを混同してゐたのではなかつたか。否、それどころかともすれば現代の今日に於て、今尚その考へを誤つてゐる人が可なりに多いことかと思ふ。

○何となれば同じ此の世と云つても佛の世界と凡夫の世界とは丸るきりその世界が別々である。従つて佛の方から云へば此の世とは即ち佛の境界、悟りの世界を云ふのであつて、凡夫の方から云へば凡夫の境界即ち迷いの世界を云ふからである。

○従つて、普通此の世とか彼の世とか云ふことは凡夫側の境界から云ふのであつて、此の世と云ふことは凡夫

の境界、迷いの世界、即ち悟りの世界、佛の世界に對して云ふのであつて、今日一般に云ふところの現實の世界を云ふのではなかつたからである。

○それを今までの佛教徒はともすれば混同するの嫌いがあつた、従つて此の世と云ふ意味を死後の未來に對しての現實の世界と誤つた感がある。そしてまた、此の事は今から七百年の昔に於て、殊に宗祖以後の淨土教の盛なりと云はれた時代に一層多い傾きがある。

四

○乍然これは主として當時の時代影響の然らしむるところであつて、私共の考へでは決して淨土教本來の中心ではないかと思ふ。従つてかうした考へはまた時代の相違によつて自然に變化して行くのである。

○此のことは已に今日の時代に於てもそれを示してゐるのであつて、現代の社會は其の社會の組織に於ても、其

の社會の思想に於ても確に昔とは大なる變化である。従て、現代の社會が昔のまゝの思想や信仰であきたらず、更に現代に適する新しき思想や信仰を求めて止まぬのも亦當然のこと、云はねばならぬ。それが私共の新しき宗教である。

○乍然かく云へばとて私共は更に佛教以外に新しき宗教を説かうとするものでもなく、亦宗祖以外に新に念佛の世界を立てやうとするものではない。たゞそれが從來の多くの佛教徒の誤つてゐたやうな厭欣心でないと思ふまでもある。

○此の意味に於て、今後の淨土教は從來のやうな古い誤つた未來觀を捨て、今日此の世から如來の慈光に照されて、更に一層の精進と努力によつて、新生の世界を日々生み出して行く可きである。(二一九、二二一—三〇、二二一、再校)

吾朋便り

□東京 土屋親道

またしても春が来ました。正月を新春と云ふもの、未だ心から春らしい心

も起りませんでした。もう三月となり、ごんを見て春のやうな氣がして居りません。道友の皆様にも御變りはないでせうか、私の一家では幸いに皆無事で居りますから、他事乍ら御安神下さい。殊に長女は十歳になり、次女も七歳

になりました。長男の光道も明けて三才になりました。今は一家の喜びの中心となつて居ります。乍然それにつけても各地に於ける道友の皆様方にも、また各自にお子様方のおありの方もあるかと思へば、俱に小供の有難さも覺ゆる次第で

あります。

○次に先月は六日から十九日まで椎尾博士と原吉郎様の代議士候補の應援に全く忙殺されました。乍然その間に於ける道友の熱心な應援ぶりには、私も思はず有難さに涙のこぼるゝを覺えませんでした。どうして信仰の友人はかくまでも自分のことを忘れて盡力して頂けるものかと思ふとき、我知らずその尊さを感ぜずにはゐられませんでした。

○椎尾博士が不幸にも落選せられたことは、社會國家の上からも亦私共同じ佛教徒の上からも、非常な悲しみの一つでありましたが、それにしても越後の原様が私共の道友として最高點で當選せられたことは此の上もない喜びでありました。必ず社會の爲めに國家の爲めにも限りない政治の改造に御盡力下さることを祈りませう。

○次に例年の行基寺の三昧會は今度から三月に繰上げて、来る二十五日から七日間となりました。少々櫻には早いやうであります、それだけ氣分も引きしまつて、眞剣にやるには何よりの好時節か

思はれます。どうか各地の道友も御勝いの上に集つて頂きたい。私も今度こそはご全力を盡してやるべく今から覺悟いたして居ります。それにまた時々は道友にも相寄り相語つて、眞實に念佛すること云ふことは日頃の生活を緊張せしめ、普段の生活を活潑ならしむる上にも大に必要なことと思ひます。

○次に私の勉強の方も思ふ程にははかどりませんが、それでも毎日近頃はかうして机の前に坐つてゐることのできる爲めに可なり喜びの生活にひたされて居ります。殊に他事乍ら御安神下さい。

○この頃、岐阜の古賀(精道)様と伊勢の谷口(年春)様が御上京になりました。御訪れ下さいました。久々のこととして大喜びでした。九州の立川團月上人と清水の中村弁康上人も去る一日から宗會の爲めに上京中です。越後の原(代議士)様も来る七日には上京の由、今から喜んで御待してゐる次第であります。

(三月四日)

□名古屋 百々治之助より
道友皆様の御健勝をお慶び申上げま

す。先月號は無暗な遅れ方をいたしました。何とも申譯ありません。只管お詫び申上げます。

實は甚だ申譯がましいやうですが先月號の印刷及發送は非常な混雑紛れの最中に行はれたのであります。ご申すのは先月は六日から十二日迄土屋主幹が當地に滞在されたを好機に、毎月二十日の例會が其の月は總選舉の日でもあり混雑するからさういふ譯で特に一日に繰上げて例會を開き、爾来道友の有志連中協力して椎尾先生の選舉應援に熱中したのであります。特に十六日からは婦人會の有志を網羅して婦人弁論部を設け、先生の推薦演説會を各所で晝夜二回十九日迄連続してやつて居る。其中に印刷子は校正を迫つて來ましても生憎其の相手の人が無く、大へん困りましたが諺に窮すれば通ずるか御迷惑ながら丁度黒宮平八様が私方へ御立寄を幸ひ暫時孫のお守を願ふて娘に校正の相手をやらせて、さういふ滑稽を演じて漸く十八日の納本期日に間に會はせたやうな状態でありました。

さて納本だけは特に大切と雖も主幹が

らの注意に其の責は果しましても全部の製本が可なり遅れ、其上私の店の方の仕事を暫く打ちやつて置いた其の整理に忙殺されてゐる内に遂々發送も延引しまして、今更何の面目も無いやうな譯であり

ます。之全く私の平素の心掛が不十分であつた爲りでありますので、今後は特に注意しますから今回限り御寛恕を願まひます。

行基寺別時三昧會案内

時 三月二十五日午前五時開白 三月三十一日閉會

所 岐阜縣海津郡城山村行基寺 (養老線美濃山崎下車約五丁)

導師 土屋觀導師

土屋上人は二十五日朝お着になります。どうぞ皆様御誘ひ合せ御隨喜下さい。

行 基 寺

誌代拂込並寄贈者御芳名

○壹圓 愛知青柳智月様、全岐阜後藤義人様、全福岡高野イナ様、全福岡林縁三郎様、全愛知桑田駒吉様、全神奈川長安寺様、全神奈川伊藤いく様、○拾圓 中野柳千様、全大阪中谷春治郎様、○貳圓 伊勢光徳寺様、

小計 九圓也

(大正十四年八月十三日) 昭和五年三月十日印刷納本 (毎月一圓十二日發行) 第三種郵便物認可

本誌定價

一部 金 十 錢 郵税共
 中 年 金 六 十 錢 全
 一ヶ年 金 一 圓 全

注文の注意

●購読希望者は代金を添へて御申込下さい
 ●誌代は總て前金御拂込の事
 ●送金は振替によるのが便利です

昭和五年 三月十日印刷納本

昭和五年 三月十二日發行

東京市芝區芝公園十四號地九番

發行兼 編輯人 土屋 觀 道

名古屋市西區隅田町二一番地

印刷人 百々 治之助

名古屋市中區錦屋町二丁目

印刷所 藤山田活版印刷所

電話東(4)三六・三五

東京市芝區芝公園十四號地九番

發行所 眞 生 社

振替口座東京四七二八八番